

云う 何のことはない本土から来たお客さんが残っていた泡盛が沢山あるということである。宮古島では酒と云えば いわゆる泡盛であってけっして日本酒は出て来ない。そのようなことで本土から来たお客さんは夕食前に多くの人々が酒を注文する。その結果が整理を必要とする酒に通じてしまう 当方にしてみればお陰様で酒の心配はなくなる。おかしなことであるがホテルに泊まっても酒代を取られないという恩恵にあずかる。勿論御新き様では 通用しないであろうが 長年のつきあいともなれば 気安さもあって「キャベツ」の追加や料理の追加も気にしない。このへんは 本土の旅館では考えられないことである。それだけ心の中にゆとりがあるというのか 純というのか 心休まる風情である。このように現地の人につわる対話のほか

にも 色々と角度の違うアングルがあって多くを考えさせられることがある。

野外調査は 学問的な目的行動であると同時に その基礎には初めて知る空間と時間が広く展開されている。例えば その土地にまつわる伝説とか歴史・風俗・習慣にいたるこまごましたものがある それを切り捨ててしまうと 何んともなく淋しい気がする。このようなことからは いわゆる民族学という分野に入るかも知れないが その辺の処を散文的に綴ったのが この「つれづれの記」であって いわゆる報告書にかけない野外調査の一面を記すのが目的であって 専門分野に深く立入ることはなるべくさけている。そのことを 了解していただきたい。 (つづく)

地学と切手



タンザニアの
ジンジャン
トロブス切手

P. Q.

ジンジとは本来アラビア語でエチオピア人の国という意味で 時には東アフリカ全体を指すことがある。リーキー (M. S. B. LEAKEY) が東アフリカのオールドバイ峡谷で調査をはじめたのが1931年で 問題の化石を掘り出したのは28年後の1959年だった。

人類の誕生と発展の歴史が画かれるようになったのはここ50年あまりの間であるが 最近の重要な発見はすべてアフリカで行なわれた。1924年ダート(R. DAART)によるアウラロピクテスはヒトと認められるまで苦闘しなければならなかった。これを援助したのがブルム(R. BROOM)のパラントロブスの研究で 彼が1934年に研究をはじめた時は67才の町医者だった。1951年83才で世を去るまでブルドーザーの如き発掘・好奇心・探究心に生きた人生がつづいた。

オールドバイ (Olduvai) は東アフリカのタンザニア北西国境近くにある峡谷で 1911年ドイツの昆虫学者が迷いこみ哺乳類化石を発見して以来知られるようになった。1913年にドイツの RUCK の率いる学術調査団が1片の人骨を持ち帰ったが大戦が始ったために実りを結ばなか

った。リーキーはケニアに生れケンブリッジに学んだあと故郷に帰っていたが 大戦後レックからオールドバイの調査を奨められた。以来ボイスの援助の下に家族ぐるみで調査にあたって来た。

高さ約70mの崖には黒色玄武岩溶岩を基盤として第1～5層までの地層が水平にみられる。ジンジャントロブス・ボイセイの化石はその第1層から発見され 礫器も伴っている。実際に頭蓋骨は400片あまりに破壊されていたが忍耐と経験の下に慎重に復原された。

化石人類の発掘が注目されたのは勿論であるが その上に人々を驚かせたのはカリフォルニア大学による K-Ar 年代決定である。1961年に出土した層渾が 157～189万年前 平均して175万年ということは それまで漠然と約100万年前と考えられていた第四紀の初めを一挙に2倍にしたことになる。その後も種々と問題はあったが 今では Matsuyama reversed epoch の中の Olduvai event として識別されている。リーキーはその後発掘をつづけ同じ第1層から第2層にかけて *Homo habilis* を発掘したりしている。

この他にオールドバイ峡谷は動物化石が多く出土 第2層上部からピテカントロブス化石や アジアやヨーロッパでは第三紀に絶滅した牙が後下方に向っているダイノテリウム象が出土するなど まさに第四紀哺乳動物の化石の宝庫となっている。

その後 1972年に長男がルドルフ湖東岸から300万年前の人類頭骨「1470」の発掘に成功するなど リーキー一家の努力が積み重ねられつつある。